

## 黙示録17章1-6節 「大淫婦バビロン」

### 1A 女の着ている座 1-2

1B 大水の上 1

2B 地の王たち 2

### 2A 不品行の杯 3-4

1B 獣の上 3

2B 豪華な身の飾り 4

### 3A 大バビロン 5-6

1B 秘められた名 5

2B 聖徒たちの血 6

## 本文

黙示録17章に入ります。私たちは既に、七つの封印にあるすべての災いを見てきました。第七の封印が解かれて、七人の御使いが出て来て七つのラッパを吹き鳴らしました。そして第七のラッパが吹き鳴らされた時に、聖所から七人の御使いが出て来て、鉢を地上にぶちまけました。その災いが下される主な対象は、獣の国とその住民です。獣の国において、イエスの御名を守る者たちは獣の名の刻印を押されること、また獣の像を拝むことを拒んで、殺されます。しかし、その住民に対して主が究極の怒りを示されます。そしてそのような災いが下った後に、獣、また偽預言者、また悪魔が最後のあがきをします。地上の王たちを惑わし、メギドの丘に集結させるのです。ハルマゲドンと呼ばれます。

ですから獣の存在は世の終わりの時に最も大きなものの一つです。けれども、もう一つ主が終わりの日に裁かれる存在があります。「大バビロン」です。主は、14章において、その獣の国に対する裁きを宣言されるとともに、「大バビロンが倒れた」という宣言もされました。「大バビロンは倒れた。倒れた。激しい御怒りを引き起こすその不品行のぶどう酒を、すべての国々の民に飲ませた者。(14:8)」そして最後の最後の災い、すなわち第七の鉢において、「16:19 また、あの大きな都は三つに裂かれ、諸国の民の町々は倒れた。そして、大バビロンは、神の前に覚えられて、神の激しい怒りのぶどう酒の杯を与えられた。」とあります。

### 1A 女の着ている座 1-2

そこで主は、御使いによってヨハネに対して、大バビロンに対する裁きを17章と18章にかけてお見せになるのです。そしてバビロンが倒れて、天に大歓声があり、それから主ご自身が天から地上に戻って来られて、獣の率いる世界の軍隊と戦われる場面が19章に出て来ます。

## 1B 大水の上 1

1 また、七つの鉢を持つ七人の御使いのひとりが来て、私に話して、こう言った。「ここに来なさい。大水の上ですわっている大淫婦へのさばきを見せましょう。

七つの鉢を持つ七人の御使いがそれらの鉢を投げつけた後に、その一人がヨハネに話しかけました。これまでも、「ここに来なさい。」という呼びかけがありましたね。黙示録 4 章において、天にヨハネを引き上げる時に、天からの声が、「ここに来なさい。」でした。全く異なるところに、ワープするかのように御霊によって引き連れて行かれます。

その場所が、「大水」であります。それがどこなのか、と言いますと、15 節に「あなたが見た水、すなわち淫婦がすわっている所は、もろもろの民族、群衆、国民、国語です。」とあります。世界の人々と言えます。けれども、大水とはそのような世界の人々の流行と言ったらよいでしょうか、世界の流れを表しているものです。ダニエル書 7 章における、ダニエルが見た幻を思い出してください、「7:2-3 私が夜、幻を見ていると、突然、天の四方の風が大海をかき立て、四頭の大きな獣が海から上がって来た。その四頭はそれぞれ異なっていた。」とありました。四頭の獣は、世界を制覇する国々であり、神の民であるイスラエルを荒らす国々であります。バビロン、ペルシヤ、ギリシヤ、そしてローマであり、そのローマから小さな角が出て、荒らす忌むべき者が現れます。そして聖徒たちにその角は打ち勝つとありました。この世、その勢いのある流れがあり、その流れにおいて、神に希望を置き、神に信頼する者たちが翻弄され、時には押しつぶされ、時には血を流すという、そういった流れを、この大水は象徴しているのです。

その上に「すわっている大淫婦」がいます。座っているということは、牛耳っている、支配している、影響力を及ぼしていると言ってよいでしょう。誰もが抗うことのできない強い力であり、それに逆らうのであれば強い圧迫を受け、迫害を受けます。そして、それが「大淫婦」というのですがなぜ突然女の存在がでてくるのか？そして、それが不品行を行ない、それによって莫大な利益を上げている女となるのか？というところでもあります。不品行と富というのは、密接に結びついています。ポルノ産業というのは莫大な収益を得ていると言われます。IT 企業よりもはるかに大きな収益と言われています。誰に対しても説明責任を持たないような存在、やりたい放題の存在です。

彼女が、大バビロンと呼ばれているのですが、これは旧約聖書を学んだ私たちは、身の覚えがあるのではないのでしょうか？主が、預言者イザヤ、そしてエレミヤによって語っていただきましたが、エルサレムを破壊し、神の民ユダヤ人を虐げ、奴隷として捕え移し、巨大な富と栄華を築き、そして偶像礼拝の奥深いところまで入り込んでいた、豪奢で冒瀆的な都です。そのバビロンについて、「女王」という言葉を使いました。「イザヤ 47:5-7 カルデア人の娘よ。黙ってすわり、やみにはいれ。あなたはもう、王国の女王と呼ばれることはないからだ。わたしは、わたしの民を怒って、わたしのゆずりの民を汚し、彼らをあなたの手に移したが、あなたは彼らをあわれまず、老人にも、ひどく重

いくびきを負わせた。あなたは『いつまでも、私は女王でいよう。』と考えて、これらのことを心に留めず、自分の終わりのことを思ってもみなかった。」主は、ご自分と人との関係を、夫と妻との関係に例えられています。神とイスラエルとの関係において、イスラエルが偶像礼拝を行なったから姦淫を犯している女に例えておられました。そしてキリストと教会は、花婿と花嫁の関係です。そして黙示録では大バビロンが大淫婦であれば、19章では教会が整えられた花嫁であり、21章では、天のエルサレムは夫のために整えられた花嫁のようであると書かれています。私たちが、キリストのみを主として、この方に愛され、この方を愛して、主のみに従うというのが、清純な花嫁であれば、自分の欲に仕え、この世が提供するあらゆる欲望を追い求め、力を得ていくというものであれば、それが不貞の女、あるいは淫婦と言えるでしょう。

## 2B 地の王たち 2

2 地の王たちは、この女と不品行を行ない、地に住む人々も、この女の不品行のぶどう酒に酔ったのです。

「地の王たち」がこの女に関わっています。つまり、この世の権力や影響力と深くかかわっています。しかも、偶像礼拝や宗教と関わっています。主なる神との関係が恵みによるものでありますが、それにとって替わる関係によって、人々はまるで酔いしれるようにしてお金を注ぎこんでいきます。いかがでしょうか、この世にある宗教は、それを求める切実な思いは純粋なものが多いです。病気の人があれば、無病息災の宗教にはまります。心の空しさを埋めるのであれば、スピリチュアル系のものが流行ります。しかし、それを行なっている者たちは、約束はしてもただ口だけで、その人々を束縛し、がんじがらめにして、お金を吸い上げて、そして酷い時は不品行をするための道具にします。カルト宗教で、女性信者を霊的な権威によって惑わし、不品行を犯す指導者がいますが、これは世の常なのです。

キリスト教会と呼ばれているところでも、異端やカルトが出現します。ペテロ第二の手紙とユダの手紙には、同じような類いの偽教師が告発されています。「2ペテロ 2:1-3 しかし、イスラエルの中には、にせ預言者も出ました。同じように、あなたがたの中にも、にせ教師が現われるようになります。彼らは、滅びをもたらす異端をひそかに持ち込み、自分たちを買い取ってくださった主を否定するようなことさえして、自分たちの身にすみやかな滅びを招いています。そして、多くの者が彼らの好色にならい、そのために真理の道がそしりを受けるのです。また彼らは、貪欲なので、作り事のことばをもってあなたがたを食物にします。彼らに対するさばきは、昔から怠りなく行なわれており、彼らが滅ぼされないままにいることはありません。」

黙示録の七つの教会でも、同じ問題を主は取り上げておられました、テアテラの教会にいた女預言者イゼベルです。「2:20-22 しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは、イゼベルという女をなすがままにさせている。この女は、預言者だと自称しているが、わたしのしもべたちを教

えて誤りに導き、不品行を行なわせ、偶像の神にささげた物を食べさせている。わたしは悔い改める機会を与えたが、この女は不品行を悔い改めようとしな。見よ。わたしは、この女を病の床に投げ込もう。また、この女と姦淫を行なう者たちも、この女の行ないを離れて悔い改めなければ、大きな患難の中に投げ込もう。」ここで、「大きな患難の中に投げ込もう」と主は言われています。教会と呼ばれているところであっても、真実に主を信じていない、悔い改めていない者たちは、大患難の中に投げ込まれます。そして、キリスト教会と名乗りながらも世の流れの中にすっかり取り込まれた中で、偽りの宗教、偽りの教えに拠り頼んでいるということが、十分にあり得るのです。

それでイエス様が、警告されました。「マタイ 7:21-23 わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。』しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』」そして、畑の中の毒麦のたとえもあります。主人は、毒麦を抜き集める時に、麦もいっしょに抜き取るかもしれないと思って、そのままにしておくことを選びますが、収穫の時期にはその実がはっきりしますので、毒麦を集めて火で焼き、良い麦も集めて倉の中に収めます。

そしてテサロニケ第二の手紙 2 章には、不法の人が現れる時に、「2:3 まず背教が起こり、不法の人、すなわち滅びの子が現れなければ、主の日は来ないからです。」とあります。教会の背教があつて、それから反キリストが現れます。ですから、ここの大淫婦とキリスト教会は、無関係ではなく、むしろ私たちの主に対する純粋な思いを汚す、世からの大きな誘惑との戦いの対峙の中で描かれています。

## **2A 不品行の杯 3-4**

### **1B 獣の上 3**

3 それから、御使いは、御霊に感じた私を荒野に連れて行った。すると私は、ひとりの女が緋色の獣に乗っているのを見た。その獣は神をけがす名で満ちており、七つの頭と十本の角を持っていた。

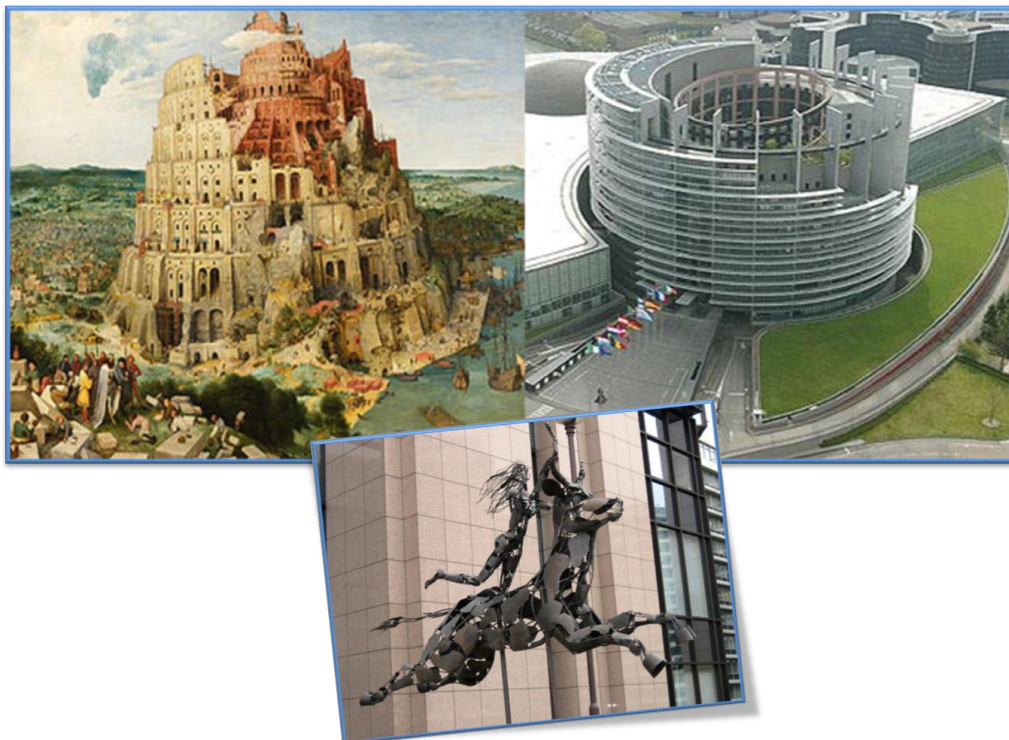
御使いによって、御霊に感じてヨハネが連れて行かれたのが、「荒野」です。ちょうど、これはイエス様ご自身が御霊に導かれて、ユダの荒野に導かれ、そこで四十日の断食後に悪魔から誘惑を受けられたことを思い出します。私たちも、同じような誘惑を受ける世にいます。そして「荒野」は、主の中にある憩いの水際とは、対照的です。主は、水を飲むことができるところに私たちを導きませんが、この女がいるところは荒野、すなわちどんなに求めても渇くしかない状態です。

そしてその女が、「緋色の獣」に乗っています。なぜ、「緋色」なのか？それは血を流す色であります。後で、聖徒たちの血を飲んでいる女の姿があり、それによって獣の背に血が滴り落ちているのでしょうか、いずれにしても血を流している存在として現れています。獣はもちろん、あの 13 章に出て来た反キリストの姿であります。「13:1 また私は見た。海から一匹の獣が上って来た。これには十本の角と七つの頭とがあった。その角には十の冠があり、その頭には神をけがす名があった。」実は、ここ 17 章の姿は獣が宗教的にも自分が神となっていく患難時代の後半ではなく、その前の前半の状態を示しているのでしょうか。この女は偶像礼拝、偽りの宗教の集合体と言ってもよいですが、世界の国々がその宗教を支えている形になっています。どの宗教も、国の権力の上に居座ることが多かったです。日本では仏教が既得権力となっており、戦国時代、それを非常に嫌った織田信長が地蔵さえ破壊したという歴史を持っています。



上の女が刻まれています。

そしてキリスト教の中でまさに、このことが起こりました。今、バチカンのところには世界の国々の指導者が謁見に行きます。そしてバチカンには莫大な富が集まります。バチカンの建造物や法王の銘がある硬貨などに、この女の姿を掘っているものがあります。そしてヨーロッパ連合(EU)の建物の前には、獣に乗った女の彫刻があります。議会の建物は、まさにバベルの塔を模したような形になっています。ユーロの硬貨にも、獣の



## 2B 豪奢な身の飾り 4

4 この女は紫と緋の衣を着ていて、金と宝石と真珠とで身を飾り、憎むべきものや自分の不品行の汚れでいっぱいになった金の杯を手を持っていた。

女は緋色だけでなく、紫色の衣を着ています。紫色は王権を示しますから、女王気取りなのです。そして、「金と宝石と真珠」で身を飾っています。これ自体に悪いことはありませんが、これに拠り頼んで不品行を行なっているということ、女の魅惑を出しているということが問題です。聖書にも、敬虔な女性は、これらのものに頼るのではなく、良い行いを飾りにしなさいという勧めがありますね。「1テモテ 2:9-10 同じように女も、つつましい身なりで、控えめに慎み深く身を飾り、はでな髪の形とか、金や真珠や高価な衣服によってではなく、むしろ、神を敬うと言っている女にふさわしく、良い行ないを自分の飾りとしなさい。」

そして、「金の杯」を手を持っていますが、そこには、「憎むべきものや自分の不品行の汚れでいっぱい」になっているとあります。忌まわしい行ない、偶像礼拝、不品行や汚れのことです。これはエレミヤの預言の、バビロンについてのところから来ているものです。「エレミヤ 51:7-8 バビロンは主の御手にある金の杯。すべての国々はこれに酔い、国々はそのぶどう酒を飲んで、酔いしれた。たちまち、バビロンは倒れて砕かれた。このために泣きわめけ。その痛みのために乳香を取れ。あるいはいやされるかもしれない。」私たちが、世の流れ、流行、そういったものを、主との関係を犠牲にして追い求めれば、その杯はいずれ砕かれるのだということを知らないといけませんね。

## 3A 大バビロン 5-6

### 1B 秘められた名 5

5 その額には、意味の秘められた名が書かれていた。すなわち、「すべての淫婦と地の憎むべきものとの母、大バビロン。」という名であった。

14 万 4 千人の神の僕が、額に神の印が与えられていましたが、女は秘められた名が額に記されています、それが、「すべての淫婦と地の憎むべきものとの母、大バビロン。」というものです。この「秘められた」というのは、奥義とも訳して良い言葉であり、「これまで隠されていたけれども、今、明らかにされる」という意味合いがあります。ここのバビロンは、歴史において、紀元前六世紀に世界を制覇して、エルサレムを破壊して、ユダヤ人を捕え移したその新バビロニア帝国だけを指しているではありません。その背後にある秘められたもの、実に創世記から黙示録にまで流れている、秘められたものであります。あらゆる生きている人間の母がエバであったように、あらゆる憎むべきもの、霊的な姦淫を犯させているものの母なる存在を、指しています。

神は世界を造られ、人を造り、人と交わることをお考えになりました。けれども、人が罪を犯して、神から離れてしまいました。代わりに犠牲の血をキリストが流すことによって、人の罪を神がお赦

しになります。そして、キリストによって神に近づく者を、神は受け入れてくださるというのが、神の備えられた良き知らせです。ところが、アダムとエバは、罪を犯した後に、裸をいちじくの木の子葉で覆おうとしましたね(創世 3:7)。自分の力で自分を贖おう、自分を救おうとする努力、これが宗教の始まりです。

ノアの時代の洪水の後、ニムロデという人が権力者となり、町々を征服していきました。「創世 10:8-10 クシュはニムロデを生んだ。ニムロデは地上で最初の権力者となった。彼は主のおかげで、力ある獵師になったので、『主のおかげで、力ある獵師ニムロデのようだ。』と言われるようになった。彼の王国の初めは、バベル、エレク、アカデであって、みな、シヌアルの地にあった。」そして人々は、神の命令に逆らって、自分たちで町を造り、自分たちで天に届こうとしました。それが、バベルの塔です。「11:1-4 さて、全地は一つのことば、一つの話しことばであった。そのころ、人々は東のほうから移動して来て、シヌアルの地に平地を見つけ、そこに定住した。彼らは互いに言った。『さあ、れんがを作ってよく焼こう。』彼らは石の代わりにれんがを用い、粘土の代わりに瀝青を用いた。そのうちに彼らは言うようになった。『さあ、われわれは町を建て、頂が天に届く塔を建て、名をあげよう。われわれが全地に散らされるといけないから。』」これが偶像礼拝の始まりです。新バビロニア帝国にも、バビロンの神マルドゥクを祭ったエ・テメン・アン・キがあります、「天と地の基礎となる建物」という意味で、まさに天に届こうとする塔です。

バビロンの宗教は、ニムロデから始まります。その神話は、その妻、セミラミスがいます。その間にタンムズが奇跡の中で生まれます、エゼキエル 8 章 14 節にタンムズの名が出て来ます。彼がいれば救い主であります。彼がよみがえったとする記念日があり、それで残念なことに、イースターという名前は、その妻であるイナンナ、バビロン名イシュタルから来ています。彼女は、エレミヤ書に出て来る「天の女王」と呼ばれています。これがその周辺のあらゆる宗教の原型となっています。カナン人はアシュタロテです。エジプト人はイシスです。ギリシヤ人はアフロディテです。ローマは、ヴィーナス(ウェヌス)です。そして不思議なことに、国として拝む時にその存在が女性的な存在となってきます。日本では仏教がなぜか観音像にあるように女性的な存在となり、神道の神話には天照大神は女性であります。そしてカトリックにおいても、神の母といってマリヤがあがめられるようになります。

このように偶像礼拝の発祥になったのがバビロンなのですが、そのユーフラテス河畔の地域に住んでいたアブラハムが、神によってそこを出て行くように命じられました。そして後に主が建てられた町が「エルサレム」である。ですから、エルサレムはバビロンに対抗して神が立てられた都であり、エルサレムがどのようなことになるかということによって、神の救いのご計画の進展を見ることが出来るのです。紀元前 586 年、エルサレムの町を破壊したのは、バビロン王国でした。バビロンはとてつもなく大きな都であり、世界の七不思議にも入っている「空中庭園」などがあつた。都の中心に、先に話しましたようにマルドゥクの神殿がありました。世界の王たちは、バビロンの富と不品行

の罪を犯していました。そしてバビロンに頼っていた者たちは、ペルシヤ王クロスが破壊した時に、大きな損害を被るのです。この偽宗教と偶像礼拝が、ヨハネの生きているローマ時代にも生き活きとしていました。皇帝礼拝やローマやギリシヤの因習としての宗教があり、それによってキリスト者は、主の御名を保つために犠牲を払ったのです。そして、主が再び来られる直前まで世界の人々を支配し、終わりの日には如実に、そのことが現れます。

## 2B 聖徒たちの血 6

6 そして、私はこの女が、聖徒たちの血とイエスの証人たちの血に酔っているのを見た。私はこの女を見たとき、非常に驚いた。

これまで、宗教は真実な信徒を迫害してきました。カインがアベルを殺したところから始まり、イスラエルの中で真実な預言者を迫害したのは祭司を始めとする、世に妥協した宗教者たちです。イエス様を殺したのも、墮落したユダヤ教の指導者たちでした。そしてローマ時代、先に話した国と宗教が絡み合っ、真実な信仰を持っている者たちが迫害されました。ペルガモの教会でも、サタンの王座がそこにあっ、それでアンティパスが殉教したことが書かれていましたね。絶えず、教会史においてこの葛藤が続きます。戦時中は、キリスト教会は神道と国家が一体になった国家神道の中で、残念ながら妥協しました。ほとんどが神社参拝をしたのです。そして日本は敗戦しました。今、私たちに押し寄せているバビロンは、「一致」「平和」「人権」「愛」などのキャッチフレーズでやって来ています。世の強い流れの中で、しっかりと信仰を保つには圧迫を感じるでしょう。その時に、「今のあなたのままでよいのだよ」と、妥協していきることが良いのだという強い圧迫を受け、事実そういった教えをする人たちが出てきています。これこそが、大バビロンです。

最後に、テモテ第二 3 章を読みます。「3:1-5 終わりの日には困難な時代がやって来ることをよく承知しておきなさい。そのときに人々は、自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、不遜な者、神をけがす者、両親に従わない者、感謝することを知らない者、汚れた者になり、情け知らずの者、和解しない者、そしる者、節制のない者、粗暴な者、善を好まない者になり、裏切る者、向こう見ずな者、慢心する者、神よりも快樂を愛する者になり、見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者になるからです。こういう人々を避けなさい。」これらのことが世に見ます、困難な時代ですが、ところが実は教会の中に敬虔を装って、これらのものが入って来るということです。ゆえに困難と言ってよいでしょう。ヨハネが驚いたように、私たちも驚愕する、衝撃的なことが起こるかもしれません、けれども予め主が語られていたことなのです。